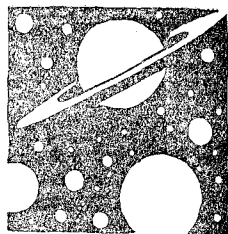


雑報と消息



○眼視連星の軌道數 1917年、二重星界の權威者たる R. G. Aitken (エイトケン) 氏が「The Binary Stars」(連星) といふ名の著書をかいた時、其の巻末に當時知られてゐた連星軌道の要素すべてを表にして掲げた。其の中には六十八個の連星軌道さ、尙ほ、他に十九個の幾らか不確實な連星軌道を含んでゐる。ところが、最近、オランダ國天文學界ブレンテン (Bulletin of the Astronomical Institute of the Netherlands) 第3巻第149頁に W. H. van den Bos (ヴァンデンボス) 氏が、又、今知れてゐる悉くの連星軌道表を發表した。之れには總計 117 個の星の軌道が掲げた。此の中で、最も短かい週期の連星はぎよしや座の首星即ちカペラで、週期は 104.092 日であるが、之れは、但し、キルソン山天文臺の二十呎干涉計で測定した結果の産物である。二重星觀測の基本的方法である測微器 (Micrometer マイクロメーター) 觀測では、やはり、どうも座デ星の週期の 6.7 年が最も短かい。

○濠洲シドニー天文臺 今般、濠洲 Sydney (シドニー) の洲立天文臺は廢止されることとなり、從來の臺長 Cooke (クーク) 氏を始め職員たちは他へ轉じ、いろいろの器械などは皆また何れかへ運ばれることとなつた。——この報知は學界のため非常に悲しむべき報知である。既に今までにも、一般に、濠洲方面の天文臺が振はないで、其のため學界の損失は多大であることが歐米至るころ嘆かれてゐたのであるが、今いよいよ Sydney 天文臺が廢止せられることは吾人が一層の寂寞を感じる所である。と同時に、今現存する吾が東洋方面の天文臺の責任と使命は一層重大となつたわけである。

○本年六月29日の日食觀測に

珍らしく英國の中央を横切つてノルウェー國へぬける此の皆既日食は、數年前から既に各國の學者や一般人士の注意を惹いてゐるが、何ふんにも英國内では皆既時間が二十數秒といふ短かさなので、多くの人々はむしろスカンデナヴィヤ半島に於いて多少なりとも長い時間の皆既を見やうと企てゐる。(詳しくは本會發行「天文年鑑」を見られよ。) 大英天文協會 (B. A. A.) ではノルウェー國のアル (Al) 市へ遠征の計畫を發表し、總費用三十ポンドとして、希望者を募集してゐる。

此の日食は同日シベリアの東部とベーリング灣でも見えるのであるが、我が日本からも其の邊へ出掛けて觀測して見やうといふ熱心家は無いものか？

○世界的經度觀測の永久設備

去る 1926 年の十月と十一月と兩月にわたり、米國アナポリス、アーリントン、ホノルル、佛國のホルドー、デシー、及びシヤム國のサイゴンで無線電信により毎日一定時に精密時刻を放送し、世界各地に於ける經度觀測の試験をやつたことは、既に本誌第 68 號、第 463 頁に報じたところであるが、此等に關連して、去る十一月 8 日フランス國アカデミー例會の席上に於いてラルマン (Ch. Lallemand) 氏は、目下、國際測地學地球物理學同盟が計畫しつつある經度觀測の永久設備のことを報告した。それによると、

1. 佛領アフリカの アルジエー市 (Algier)
2. 支那の 上海市
3. 米國西岸の サンディエゴ市 (San Diego)

の三ヶ所に無線電信による時刻放送局が

建設される筈であるといふ。——此の三局は相互にほぼ120度づつの経度の差に離れてゐる場所として選定されたものである。

○米國學術協會の賞與 1924年以來、米國の學術協會(A. A. Advancement of Science)では年に一度づつ、理學上の功績者に金1000ドルづつの賞典をすることになつて居り、天文學に關しては1925年一月ワシントン市での總會に於いて、キルソン山天文臺のハッブル(E. B. Hubble)氏に「渦巻星雲中のセファイ式變光星研究」に對して此の賞が贈られた。最近報によると、今1927年一月のカンサス市での總會に於いて、クリーヴランド市ケース理學校教授ミラー(D. C. Miller)氏は「宇宙エーテルの相對運動に關する研究」により此の賞金を授けられた由。

○ロレンツ教授の渡米 理論物理學者として有名なオランダ國ライデン大學教授ロレンツ(H. A. Lorentz)氏は目下米國に滞在中、去る十一月にはコーネル大學で講演した。其の後、太平洋岸に行き、本年一月と二月にはバサデナ市の加州工學院で講演し、四月にはオランダへ歸る由。

○天體宇宙の最奥は? 去る十二月7日米國ワシントン市のカーネギー學院で、キルソン山天文臺のハッブル(E. B. Hubble)氏が講演した所に據るに、同天文臺の「百吋」望遠鏡で今觀測し得る最遠方の星雲は

840,000,000,000,000,000,000 マイル

即ち 345,000,000,000,000,000,000 里の距離であるといふ。之れは又換言すれば一億四千萬光年となる。即ち、キルソン山の大反射鏡により、吾人は太陽を中心とし、半徑一億四千萬光年の大球内の天體を觀測し得るのであるが、ハッブル氏の言によれば、此の大球形内に約二百萬個の星雲が存在し、其の分布はほぼ一様である。勿論此の多數の中には可なり近いものも無いではない。最も近いのは

小マゼラン雲 距離102000光年、

大マゼラン雲 同 112000

メシエ第三十三番(N. G. C. 598)

同 1000000光年、

アンドロメ大星雲(N. G. C. 224)

同 950000光年、

N. G. C. 6822 同 1000000

ハッブル氏の講演の一節に曰く

「星雲は非常に遠いものでありますから、吾々が此れを觀測して居ると言ふことは即ち吾々の過去の遠いいろいろな地質時代(Geological ages)に起つた事件を見せ付けられてゐると同じ意味であります。最も近距離のマゼラン雲は即ち大氷河時代の頃の有様を見せて居り、又、**アンドロメ**星雲は鮮新(Pliocene)時代の物であります。又、觀測し得る最も遠い極限のものは即ち後期古世(paleozoic)時代のものであるわけです。ごく近頃に起つた事件は今光波の速度を以つて吾々の方へ通信が送られてある途中にあるのですから、非常に思ひ切つた豫言者だけが此うした將來のニスを言ひ當てるのでせう。

「しかし、吾人に見える宇宙の極限といふものは、要するに機械の能力によつて決定せられるのです。今のよりももつこ感じの良い寫眞原板さ、もつこ大きな望遠鏡があれば、今知られてゐるより更に幾倍かの遠方も見えるのであります。實際、今吾々が見込みのありそうだと思つて居ます或る種の改良を加へただけでも、殆んど地球が生れたばかりのやうな大昔しの時代の景色を見せてゐる十幾億光年の遠い星雲を寫眞に撮ることも、近いうちに可能となるのでありませう。」云々。

○大英天文協會々長新任 大英天文協會(B. A. A.)は昨1926年十月27日いつもの Sion College で總會を開き、1924年の秋以來の會長 C. D. P. Davies 師の満期辭任と共に新會長の選出をした。始め、同會々計の Henry Ellis 氏が當選したが、會計と會長とを兼ねることは不可能であり、Ellis 氏は自ら會計の職に留らんことを希望せられたので、遂に W. H. Steavenson 博士が會長に擧げられた。

ちなみに、此の會は吾が天文同好會と同様な目的と性質を有する會であるが、1890年にロンドンで創立されたもので、昨年(1926年)十月現在の會員總數 975 名

である。總會の席上、舊會長 Davies 師は慣例によつて一場の引退記念講演をした。題は「反射望遠鏡の歴史」で、グレゴリの昔から、コンモンまでの事を述べられた。

此の總會には、偶然、米國アンナホア大學の天文臺長ハセイ(W. J. Hussey)氏と、同大學助教ロシター(R. A. Rossiter)氏とが出席し、會長の講演後、兩氏が交々小演説をした。兩氏はちようご其の時南アフリカへ「二十七時」の大望遠鏡を持

つて行つて新しい天文臺を建設する爲の途中、英國に立ち寄つたのであつた。——しかるに、不幸にして、ハセイ臺長は此の總會の日の夜、ホテルで心臓麻痺を起し、急死した!! ハセイ氏は米國天文學界の元老であるから、此の死の報知は各國の人々を驚ろかしたものである。しかし、其の後、ロシターは單獨で、豫定の如く、南アフリカに向つて出發した。

通 信 及 報 告

上田支部報告

上田「星の研究會」は本年度の納會を十二月十八日午後七時より上田圖書館内にした。折柄大風雪の夜なるにも拘らず集會まる同好の士は五十名、中には數里の遠くから定刻までに來會した熱心な會員もあつた。支部幹事宮島善一郎氏は宇宙開闢論の題下に最近の學說を紹介し、上田蠶糸專門學校教授原田親雄氏は天文學と物理學との關係について詳論せられて午後九時講演を了つた。

圖書館長岡崎袈裟雄氏は會員を代表し講師宮島氏に對し慰勞の辭を述べられた。それより會員はストーブを圍み種々なる質問や雑談に時を移したが、自然に惠まれた上田市に是非天文臺を建設したことの議が起り、これが實現に努力する事を申合せて午後十一時盛會裡に閉會した。(上田支部通信)

岡山支部通信

十月九日 宮原幹事宅で天界研究會。
十月十四日 關西中學校で黒點觀測會。
水野幹事の上洛。十月十六日上洛。十七日は午前中と午後の學術協會の講演を聽聞。それから天文同好會總會に出席十八日再び大學に。同夜歸岡された。
十一月十一日 下村内務部長宅で天體觀測。

十一月十三日 宮原幹事宅で天界研究會
十一月二十日 六高科學會主催で天文講話會が催され、來縣中の山本博士は「經緯度測定法」について講話された。

十二月十一日 宮原幹事宅で天界研究會
十二月十八日 倉敷小學校で天文講話が催され、水野幹事は「星の光度」と「恒星」さについて述べ、併せて「倉敷天文臺」について實地説明をせられた。

倉 敷 通 信

岡山支部報告

1. 毎月第一と第三との土曜日を公開日と定め、當日は通俗講演と天體觀測さを行ふことにした。
2. 第一回公開日。大正十五年十二月四日午後七時から、臺員理學士宮原節氏「反射望遠鏡」の話について講演した。來聽者兒島商船學校教員、生徒十二名、關西中學校生徒二十餘名、川上郡高倉村女學生三十餘名其他數十名あつて、講演後觀測會が催された。
3. 第二回公開日。十二月十八日午後一時から御津郡及び都窪郡教員團六十餘名の爲めに水野主事は天文臺について詳細なる説明を試み太陽の觀測をした午後六時から岡山醫科大學醫局長原勝己氏外二十三名の爲めに、水野主事は「天體の大きさ、距離」について特別講演を試みそれから天文臺を案内した午後七時から通俗講演會が開かれ、水野主事は「十二月の天」なる題下一場の講演を試み、その後若干の天體を觀測した。
4. 十二月中の參觀人。
七日。大阪市第二西野田小學校 正田正三
八日。岡山歩兵第十聯隊大尉山本道三 外八名。
十七日。御津郡教員團片山基太郎外十三名。
二十四日。都窪郡豐洲小學校 秋田秀一 外八十三名。 水野 主事

會 員 消 息

理學士 竹田新一郎氏は去る二月より京大理學部宇宙物理學教室の講師とされた。